

東京白楊だより

第23号
平成12.9.1
(2000年)



白楊ヶ丘同窓会東京支部

旧制函館中学校
函館中部高等学校

ホームページアドレス <http://www2.hotweb.or.jp/hakuyou/>



国際観光都市・函館

感謝のことば



白楊ヶ丘同窓会東京支部長

二上 達也

52期(昭和25年卒)

皆様お変わりありませんか、昨今妖しげな事件が続き、天変地変無気味な動きを感じています。これも情報過多時代にあつて、余分な情報が提供され、不安感を増幅しているように思えます。

私の個人的なことでありますが、夏場のゴルフで熱中症になり、救急車にかつぎ込まれました。

これも貴重な体験だと笑つてすませたものの、直接にはパートナーの方々とゴルフ場関係、病院関係から、亭主の留守にのんびり羽根をのばしている家内を突然呼び出して、遠方まで足を運ばせるなど、とにかく多勢の方々につきり迷惑をおかけしました。

だから急に元気がなくなり、次期支部長役を杉田さんをお願いしたというわけではありません。

大きな変動はだれしも望むとは思いませんが、自然な形での変化は、清新の気を生んで組織の活性化が図られるでしょう。

もともと私自身は先頭に立って「俺についてこい」のタイプではないと思つています。

事実、幹事役の皆さんに支えられ、何とか任をはたしてきた格好です。

勿論これからも同窓会の一員として、応援に微力をつくすつもりです。

今までの我儘勝手をお詫びするとともに、肩の力を抜いた形で、皆様とお付き合いを続けさせて下さい。本当に有難うございました。

お詫び旁々御礼に代えます。

前年実績プラスワン

函館中部高等学校長 内田政明



平成十二年度の同窓会東京支部総会並びに親睦大会に当たり、本校の現状報告を兼ねてご挨拶を申し上げます。

今春三月に卒業した第一〇二期生はハクラス三三〇名でしたが、四月に入学した新一年生は七クラス二八〇名で、これで一年から三年まで全て七クラスとなりました。近年の少子化により、郡部においては統廃合も進んでおり、今後函館市内の各高校の規模はどのようになるのか、どのような高校配置となるのか、国の教育改革の動きと併せて様々な議論がなされております。

進路状況については、国公立現役合格一〇〇名の線は例年どおりですが、今年の春は内容的に高く評価できるものがあり、例えば、北大は医学部を含め四年ぶりに二〇〇名を越えました。

生徒数の減少に伴い教員定数も少なくなりますが、従来からの部活動はそのままであり、一人で二、三部の顧問を担う教員が出るなど、教員の負担が増えつつあります。本

校の教育活動全般のバランスを点検し、必要な手立てを講じなければならぬと考えています。

さて、七月末現在、校長室には優勝旗四本、カップ八個、楯一個が飾られています。校長室を訪れる来客からは「これは全部今年のもですか。」と質問されます。そのたと知るとほとんどの方は驚きます。更に私は「カップはないが、水泳も団体三つ、個人二十の入賞を果たしました。」と付け加えています。

昨年の記憶では、職員室のどこかに行くかを飾る程度であったように思います。しかし、今年は片隅では置ききれず、来年の大会で返還しなければならぬものなので、大切に保管することを兼ねて一年間校長室に置くことになりました。

四月の始業式で、十二年度の目標を「前年実績プラスワン」と呼びかけました。これは本校の教育活動の全ての分野を対象としており、例えば、部活動において昨年準決勝までなら今年は決勝まで、成績が四であれば今年は五を、そして、勿論来春の進路実績をも視野に入れた呼びかけです。しかし、この呼びかけ一つで優勝旗やカップの数が急増したとは単純に考えてはなりません。子供達の努力や顧問教師の熱心な指導があったことは間違いない事実でしょうが、接戦を見ている幸運の女神が、本校に微笑み

かけてくれた部分もあったのかも知れません。しかし、ツキも実力のうち」と言う言葉もあります。

どこからともなく全道大会出場壮行会の話が持ち上がってきまして、毎年定期的に計画されているものではありませんが、校内のこのような雰囲気や盛り上がりは、必ずや教育活動の様々な面に目に見えない波及効果を生み出すものです。

全道大会を終えて、今年度は放送(アナウンス部門二名)、将棋(個人戦一名)、水泳(個人、団体六名)が全国大会に出場します。

以前からよく、部活動の成績がよい年は進路の成績もよい」と広く言われています。その確たる証拠を示すことはできませんが、おそらく多くの事例があればこそ、でありましょう。確かにどの分野であれ、努力が一定の満足な成果(成績)につながったという達成感、充実感、次なる意欲や自信への源泉となることは容易に想像できることです。

今年度の部活動の成果は、文武両道を標榜する本校には幸先のない出だしと言えます。この勢いをこの後どう維持し続けるかが、教師、生徒双方に課せられた宿題です。

教育活動は教師と生徒の共同作業とか学校と家庭の共同作業などと言われます。双方の歯車をしっかりと噛み合わせる努力こそが、その宿題を解く鍵と言えましょう。

白楊ヶ丘同窓会東京支部の皆様には、本校へのご支援、後輩への激励など、今後とも何かとお世話になることと思っております。何卒よろしくお願ひ申し上げます。学校の近況報告を兼ねてご挨拶と致します。

函中一〇〇年記念会館

教諭・会館運営委員 中森 司

白楊ヶ丘同窓会館は、一九八四年(昭和五九年)軽自動車協会が移転したのに伴い白楊ヶ丘同窓会が購入、改築して合宿などに使用してまいりました。一九九五年(平成七年)の一〇〇周年にあたり、記念事業の一環として約六千万円をかけて増改築が行われ、名称も『函中一〇〇年記念会館』と改めました。

年間の利用者は約七〇〇人で、五月のゴールデンウィーク、夏、冬、春の休みには運動部や文化部の合宿、学級分散会、生徒会などの研修会が行われております。それ以外にもPTA母の会の研修会、同窓会の懇親会や事務局会議、旧職員会の打合わせなど、多種多様な用途に利用されております。

函中一〇〇年記念会館は、白楊ヶ丘同窓会の財産です。白楊ヶ丘同窓会特別財務管理委員会が管理運営に関する事務を校長に委任し、校長が毎年、会館の管理担当者を選任しています。今年度の運営委員会は教頭を含めた教員七人と事務職員一名で構成されており、

利用される場合には運営委員に申出て下さい。



白楊ヶ丘同窓会東京支部 第23回親睦大会



講演する安藤牧子さん

65期(昭和38年卒) 菅原 大作
副支部長

“心のオアシス東京支部を活力ある集いに”をテーマに、白楊ヶ丘同窓会東京支部の平成11年度「第23回親睦大会」が、10月22日(金)午後5時より、東京・千代田区九段南の「九段会館」で、来賓及び同窓生など約210人が参加して行われた。

今年の特別企画は、安藤牧子さん(日本植物画倶楽部会員・昭和42年卒・69期)が、「花と出会う人と出会う」と題して、植物画を描くことによって交流を深めた人々との出会いについての講演と、安藤さんが描いた野草や花などの精密画(ボタニカルアート)の作品展示を行った。



講演会の終了後、会場を代えて、午後六時より、懇親大会に移った。大会の司会は、第68期・木戸正文氏と第78期・岡部あさ子さんが担当した。大会では、最初に、第69期・米木かをりさんのピアノ伴奏で、旧制・函館中学校校歌(同窓会歌)「玄冥の北の道……」を全員で合唱。雰囲気盛り上げた。続いて、支部長の二上達也氏

(52期)が、「大会には、母校の校長を始め、本部同窓会長、札幌、函館、関西の各支部関係者、函館市東京事務所、函館圏公立大学広域連合事務局、函館西、東両校の同窓会からもご出席いただいた。本日は函館を懐かしく思い出しながらご参加の皆さんと語り合いたい」と開会のあいさつを行った。次に、来賓として出席された内田政明函館中部高校長、山内隆陽白楊ヶ丘同窓会長、田中哲夫同窓会長、高橋治郎同窓副支部長、山名田英雄同窓副支部長、菊池康三函館市東京事務所長、菊池輝同所参事、大原仁函館圏公立大学広域連合事務局次長、新谷義克函館西高等学校・つつじヶ丘同窓会長、加藤東部・渡部久二男同窓会長、伊藤欣子・小泉茂生函館東高等学校・関東地区青雲同窓会副会長、新山春一同窓幹事長をそれぞれ紹介した。



司会の木戸正文副支部長と岡部あさ子理事

来賓を代表して内田校長は、「今年四月に第三十一代校長に就任した。同窓会の皆様方には、本校の諸活動への力強いご支援に對し改めて感謝したい。本校は、少子化に伴い、一時期一学年十クラスだったものが、現在は三年生八クラス、一・二年生七クラス。平成十二年度は各七クラスになる。男女比は、全日制は男子が、定時制は女子がわずかに多く、全体では男女ほぼ同数。本校の教育方針は文武両道だが、道内中で中部高校が名実共にナンバーワン。暑かった今年の夏も生徒は夏期講習と部活動に励んでいた。長い歴史と伝統に支えられた本校も、やがて学校週五日制を迎える。今まで取り組んできた行事の中から、何を残し、何をやめるか検討時期にきている。四年前に校舎が新築された。来函の際には、母校を訪ねていただきたい」と述べた。続いて、山内同窓会長は、「同窓生は、函館圏に五〇%、札幌を中心とした道内に二〇%、関東圏に二二%、関西圏に八%いる。人数が多い東京支部の大会は、記念講演などの企画が充実して毎年大変



二上達也 支部長

な盛会であり、本部と各地支部は刺激を受けている。また、機関紙「東京白楊だより」もきめ細かな記事が満載されている。本部でもこれに負けない紙面作りを目指している」とあいさつした。

続いて、菊池東京事務所長が「昭和五十九年に函館と大野、上磯、七飯の一市三町が通産省のテクノポリス地域に指定され、産・学・住の調和の取れた街にするための企業誘致を目的に、六十年に事務所が開設された。現在まで、三五企業を誘致し、函館に一八企業が進出した。ただし、バブル崩壊後は全くない。情報を教えてほしい」とあいさつした。

また、大原広域連合事務局次長は、平成十二年四月開校予定の公立はこだて未来大学について、大学の概要と募集要綱を説明、さらに約百五十億円もの巨額の経費への募金を要請した。



来賓の方々

この後、今年新卒の石田雄一君（平成11年卒業・一〇二期）ら、一六人の首頭で乾杯し、懇親会に移った。

会場内には、例年と同様に、函館市東京事務所から寄贈を受けた函館の夜景や湯の川温泉、元町界隈などのポスターが多数貼られ、雰囲気盛り上げた。

一年振りあるいは久しぶし振りに顔を会わせた会員の間では、先輩、後輩の隔てなく会話が弾み、随所で懐かしい函館弁が聞かれた。また、記念写真のストロボが光るなど、会場内は終始和やかな雰囲気包まれていた。

また、北海道七飯町産のジャガイモを産地から直送する同窓会特別賞を始め、函館市東京事務所寄贈のワインや会員寄贈の洋酒やテレホンカードなど、およそ八十点が用意された恒例の寄贈品抽



内田政明 校長



101期生による乾杯

選会では、賞品が当たる度に歓声が上がり、一段と雰囲気盛り上がっていた。

大会の最後に、校歌「火柱のはためく峰も……」を全員で合唱。次回の再会を約束して、午後八時三十分過ぎ終了、散会した。



山内隆陽 同窓会長

第23回・東京支部親睦大会出席者一覧 (平成11年10月22日・九段会館)

- 昭和7年卒(34期) 徳田 肇
- 昭和9年卒(36期) 秋濱晴彦・出町 卓・松原竹造
- 昭和12年卒(39期) 安味貞和
- 昭和13年卒(40期) 井上 勲・相馬正樹・前田季邦
- 昭和15年卒(42期) 飯島 繁・小山田彰・村山正郎
- 安富隼平
- 昭和16年卒(43期) 家坂孝男・井筒吉彦・神山茂郎
- 鈴木達男
- 昭和18年卒(45期) 田沼修二・中村哲夫・船木政司
- 昭和19年卒(46期) 渡辺保二
- 昭和20年卒(48期) 篠田作衛・橋本寛治・松木養三
- 渡辺丞二
- 昭和23、24年卒(51期) 小野寺吉彦・三國比左男
- 昭和25年卒(52期) 石田 端・井上 稔・高尾忠良
- 瀬田松吉昭・高野 保
- 長島 康・中村勝哉・福津達男
- 二上達也・吉川 進
- 昭和27年卒(54期) 遠藤 弘・澤口幹男・松岡康弘
- 杉田博子
- 昭和28年卒(55期) 赤澤 高・東 時雄・大澤勘八
- 加藤富藏・北原 徹・栗崎健一
- 三浦昭夫・河村和子・田村保子
- 山口ヒロ・横井静子
- 昭和29年卒(56期) 浅岡 勤・加藤正秋・高橋正美
- 弦木 健・内藤 博・西田 実
- 塚本弘子・沼崎茂子・松本佐和子
- 昭和30年卒(57期) 野村 實・濱田 實・吉田精吾
- 堀江郁子・松川澄子・和田勝代
- 昭和32年卒(59期) 小林重行・坪田丞司・真船 昭
- 水木満雄・伊藤征子・岸本文子
- 昭和33年卒(60期) 伊藤威史・上平慶一・大山 満
- 北原耕太郎・越田正義
- 佐々木寿一・紅谷弘一
- 松田栄美子
- 昭和34年卒(61期) 金子公彦・菊池康宏・野坂和範
- 橋本正夫・畑中万弘・三上洋一
- 森岡達郎・青木真紀子
- 利光美子・藤田美穂子
- 堀内恵子・三上和子
- 昭和35年卒(62期) 荒井 浩・小松康宏



- 昭和36年卒(63期) 八田邦夫・松本光平
- 越後谷宏・小熊勝夫・小林嘉則
- 昭和37年卒(64期) 中村 崇・土橋道子・福本元子
- 佐々二郎・徳田定勝・林 高裕
- 泉 清美・杉浦幸子
- 昭和38年卒(65期) 菅原大作・千葉恵寿・白石由美子
- 昭和39年卒(66期) 小野 豊・石塚昌子・原 恵子
- 昭和40年卒(67期) 岩間昌夫・大山 優・松田幹夫
- 安田康次
- 昭和41年卒(68期) 奥野友行・木戸正文・相馬 亮
- 万能誠一・山本晴義
- 昭和42年卒(69期) 大河原綾子・児玉久美子
- 梅田五郎・奥野政博・高木 隆
- 竹本義明・吉田雄治・安藤牧子
- 梅田やよい・大久保節子
- 長谷川八穂子・松川宏子
- 山本久恵・山本陽子
- 吉田淑子・米木かをり
- 昭和43年卒(70期) 佐藤勝義・佐藤繁男・高橋裕司
- 吉田昭二・大塚幸枝・養田啓子
- 片岡 進・大田和裕美
- 神垣善一
- 昭和44年卒(71期) 近藤 薫・吉川忠幸・桑原洋子
- 昭和45年卒(72期) 佐々木雅裕・島津路郎
- 昭和48年卒(75期) 斯波宇司・武井浩一・長澤一徳
- 昭和51年卒(78期) 成田吉道・福本泰久・山平匡人
- 吉崎 収・岡部あさ子
- 富山香里・藤島清美・吉崎加代子
- 高橋政章・地原麻恵・西田勢津子
- 片瀬裕巳
- 昭和52年卒(79期) 松永 久
- 昭和53年卒(80期) 大嶋紀安
- 昭和54年卒(81期) 石田雄一・尾形浩一・小松祐樹
- 平成4年卒(94期) 佐々木宏樹・柴田 祥
- 平成11年卒(101期) 鉢呂浩之・保立恵太・山本卓也
- 山本 司・佐賀井奈美
- 相馬絵里・高田文子・高橋晶子
- 高橋令恵・三ツ石泰子
- 輪島佐美
- 佐々木慎悦・辻 明



(5) 東京白楊だより

講演記録

第23回白楊ヶ丘同窓会東京支部親睦大会 平成二一年一〇月二三日(東京九段会館)

『花と出会って人と出会う』

ボタニカルアーティスト

安藤 牧子

(69期・42年卒)

◎安藤(旧姓・笹田)牧子さん略歴
1948年・函館生まれ。1967年・中部高校を卒業(第69期)。北海道石狩市在住。夫と2人の息子との4人家族。1990年・朝日カルチャー教室で3年間、植物画家、清水晶子先生、早川尚先生に師事。1993年・国立科学博物館主催第9回植物画コンクールにおいて文部大臣賞受賞 作品ヤマゴボウ。1994年・同コンクールで佳作受賞 作品ハマナス。石狩町芸術文化功績賞受賞。1996年・植物画集「石狩花紀行(第1集)花たちの肖像(第1集)」のポストカードを発行。市立函館博物館で作品展示。1999年・植物画集「石狩花紀行(第2集)花たちの肖像(第2集)」のポストカードを発行。札幌と東京で、個展を計3回開催。現在、日本植物画倶楽部会員、北海道植物画協会会員、さっぽろ植物画同好会会員。

ボタニカル・アート

私は十年ほど前から「植物画」と言っ絵を描き始めました。この植物画とは簡単に言いますと植物の細密画と言っことになりす。科学的に正確に、しかも美しく描かなければなりす。英語で言いますとボタニカルアート。ボタニカルとは植物学的と言っことすので、植物学的美術とでも訳しすしょうか。最近はこのボタニカルアートというほっがご存知の方が多いかもしれす。気を付けて見まわす



と、私たちの身の回りにもホテルやレストランなどに、インテリアとしてよく飾られております。

起源はヨーロッパで、カラー写真の無かつた時代に薬草の識別や図鑑などに使っために、描かれておりました。現在では大部分の分野でカラー写真にとつて変わられ、アートとしての意味が昔以上に、求められるようになってきております。ヨーロッパでは十八世紀フランスのルードーテやイギリスのフイツチたちが、すばらしい絵を残してあります。パリやユリやアジサイなどがプリントされて、世界中の人々に手ごるな価格でカードやカレンダーなどに使われております。日本でも近年では植物学者の牧野富太郎氏、画家の太田洋愛氏、また昨年亡くなられました山口善雄氏、佐藤広喜氏という方々がすばらしい作品を残されてあります。

習っことの楽しさ

古い話はこれくらいにして、私と植物画についてお話ししたいと思っす。十年ほど前、私は札幌のあるギャラリーで、この植物画のグループ

展を初めて観ました。そのとき受けた感動と言っか衝撃は今でも鮮明に覚えてあります。

日ごろ何気なく見過っしていた道端の草花が、「こんなにも美しくかつたのか」と、しみじみ見入つてしまいました。絵に描かれていなければこんなにも身近で、見つめることなどなかつた草花たちでした。それから一カ月後、札幌市内のカルチャー教室でこの植物画を習い始めました。葉っぱ一枚から描き始めましたが、何の絵の心得も無い私でしたからなかなかうまく描けませんでした。

それでもこのつ描くうちに、少しずつが見られる絵が描けるようになる、嬉しくて家族に「どうを?どうを?」と言つてみてもらいました。厳しい批評を受けると内心面白くないのですが、結構みんな的を射たことを言っすね。家族はお世辞も遠慮も嫉妬もありませし、たごえ厳しい批評をされても割と後を引きませしからね。家族の言葉と言っのはありがたいものです。でも二人の息子も親元を離れていき、今は最も口数の少な

い批評家の夫と、二人暮らしになつてしまいました。この批評家、口数は少ないですが、私にとつて今のところ最高の理解者であり、協力者でもあります。

専業主婦だつた私が植物画をはじめたのは上の子が高校生、下の子が小学四年生の頃でした。子育てのときもすつと家に居て、子供と係わりながら描けたのは、幸せな時間でした。下の息子は友達をぞろぞろ連れてきては、うちのお母さん花の絵描いてるんだぞ!と言つて、ゆべを手渡して見せてあげていました。子供たちも結構興味をもつて観てくれて、おばさんなんて言っ花描いてるの?と、聞いてくるようになりました。

そんなこともあつて、私は何度か町内の子供たち向けに、夏休み植物画教室をしたこともありす。そのときは、お花をすつと観察して描こつたね!と言つとルーペを使つたりして真剣に観察して描きます。ちよつともよくかけると、私がつても誉めるものですからさらに一生懸命描きます。そのうちだんだん楽しくなつてくるんですね。学校の先

生には申し訳ないのですが、おばさん学校の絵の時間より面白い!と言つてくれて、夏休みの絵の宿題を完成させて帰つていきす。誉められると誰だつて嬉しい、頑張りすよ。私自身が実に単純な人間すから、その気持ちとてもよく解るんですね。そしてなんでも一生懸命やると楽しくなるんですね。

ヤマゴボウの絵

さて三年間カルチャー教室に通つた後は、もつと自由に描いて見たいと思っ一人でコンクツと描きつづけました。描き始めて三年後、国立科学博物館主催全国植物画コンクールで、最優秀の文部大臣賞をいただきました。その作品が今日会場にも展示してあります。ヤマゴボウの絵です。この絵は今も絵葉書やカードとして上野の国立科学博物館のショップで売られておりますが、いまだに版權は国立科学博物館のものなので、私が絵葉書を作るときは使用料を支払わなければなりす。では、ヤマゴボウの絵を描いたときのことを、お話ししたいと思っま

す。このヤマゴボウという花を見つけたのは市内の家が取り壊された空き地でした。春六月頃小さな白い五弁の花を房状に咲かせていました。私たちが何気なく雑草と言っていたのが、申し訳ないくらい美しい花でした。秋になってその場所へ行ってみると、ワインレッドの美しい実が太陽に照り映えて、きらきらと宝石のようでした。またまた描かずにはおれない気持ちになりました。この植物の名前がヤマゴボウというからには、きつと牛蒡のような根だろうと掘ってみると、とても立派な根っこでした。早速きれいに洗って、バットに水を少し張ってその中に入れて観察しながら、花のバツクに画面いっぱい描きました。こつこつと出来上がったのがヤマゴボウの作品でした。

実はこのことについてはちょっとした裏話がありまして、もう時効と思うのでお話しませんが、私は



文部大臣賞 受賞作品「ヤマゴボウ」

賞をいただいた前年にこの作品を応募したのですが、係りの方が私の作品の封を切るのを忘れて、審査されなかったのです。そのことで電話がかかってきました。そしてお詫びとともに「とてもすばらしい作品なので、この絵を一年間預らせてください」とおっしゃいました。一係員のミスで、私の絵は次の年まで審査を待つことになりました。

しかしその頃は植物画をはじめめてまだ二年目、来年応募する頃にはきつと今よりはもう少しは上手くなっているのではと思い、やはりその絵は返却していただきました。そしてその花とまた一年間向き合っただけでじっくり観察し、応募したのと同じ絵を描きました。考えてみればそのことが絵のレベルも上がり、良い結果をもたらしたのかもしれない。その係員がそのミスを上司に報告したかどうかは、私には分かりませんが、「くれぐれも内密に」とい

うことでした。

しかし、このことで初応募にしてこの最高の賞をいただいたと言ったことになりました。審査の先生の講評では、「今までの作品にはないスタイルで、ダイナミックな構図でありながら鋭い観察眼で繊細に表現されていて、植物の持つ生命力が伝わってくる」と確かそんなお言葉をいただきました。もう六年も前のことになりましたが。

絵葉書を見て……

さて、お話変わって趣味で植物画を描いていた私が何で絵葉書など出したのかと言うことについてお話ししたいと思います。今から四年前、この方も函中の同期の人ですが函館博物館の館長だったこともあり、「植物画の展示をしてくださいませんか」との依頼がありました。

函館で展示していただければ私の友人、知人そして親戚ももしかして見てくれるかしらと思ってお引き受けることにしました。そのとき博物館の方から「絵葉書か何かないでしょうか？」とたずねられ絵葉書を作ることを決心しました。決心と言うとオーバーのように聞こえますが、趣味で絵を描いている私にとって売れるかどうかは分らないのに、まあちよつとしたリスクのある投資のようなものですか。

私は身近な花をと思い、いつも石狩に咲く野の花を描いておりましたので、そんな野草を集めた「石狩花紀行」という絵葉書集でこの中には文部大臣賞をいただいた

ヤマゴボウと佳作のハマナスも入っておりまして。そして北海道は冬、雪に閉ざされますので花屋さんで求めた栽培された華やかな花も描いておりました。そんな花を集めた「花たちの肖像」と題したものとこの2種類の絵葉書集を作りました。

この絵葉書を発行してから、少しずつ私の身の回りに変化が起きてきました。まもなくこの絵葉書集が、友人のそのまた友人の手を経て、石狩市の役職の方の目に止まり、電話がかかってきました。お話によると石狩市の第三セクター経営の温泉と石狩海浜公園のピクニックセンターに置いてくれませんかと言うことでした。この絵葉書集のタイトルが「石狩花紀行」ということがきつと幸いしたのでしょう。

このお話は私にとっても願ってもないことでした。原画を縮小していいとはいえ私の絵を見ていただく、良いチャンスとなりました。実際、今年銀座での個展で通りがかりに見てくださった方で、私、北海道旅行したとき、石狩でこの絵葉書を買いました！と言って懐かしそうに私の絵を見てくださった方が二人もおりました。偶然であるものですね。

また販売してまもなくの頃でした。富良野に住むという方からお便りをいただきました。しかも私の絵葉書で、どうしてそんなところから私の絵葉書でお便りが来たのかと驚きました。文面にはこうありまして。前文を省きますが五月九日子宮ガンで全摘手術を無事

終え、少し元気になりました。消灯の絵葉書を飾りかえようと、ヤマゴボウの絵葉書を取り出しました。手術前には気づかなかった力強さ、溢れんばかりの生命力を感じ涙があふれて止まりませんでした。八十歳を超えた親、そして夫や子供、兄妹たちのためにも一日一日大切に生きていこうと勇気を与えていただきました。そんな文面でした。

絵だけでなく全てのものに言えることですが、その時その人の心の有り様で感動の深さも違ってくるのだな……と思いました。そして私の拙い絵がこんなところでお役に立てたなんて私のほうが感激でした。実はこの方、私の近くにすむ友人のお姉様だったことが、ずいっとならなくなって判かりました。

目からウロコ

また、絵葉書を買ったという方からも手紙や電話をいただきました。その中で今では私の大切な友人となった方がいらっしゃいます。私の母くらいの年齢の方で、初めてのお手紙にこんなことを書いていました。「お店に絵葉書はたくさん売っていますが、一枚一枚にメッセージを添えて、またパッケジにはあなたの想いも詰まっています、とても感激しました。」とありました。

その方は、ポラントピアをされながら短歌も詠まれる方でした。東京方面に親戚や友人がたくさんいらっしやるということで、いつも手元に北海道の花や景色の絵葉書を用意して、お便りされるとの



石狩花紀行(1・2集) 花たちの肖像(1・2集)

がたく、そしてほうとさせられる存在の方なのです。

色が命

ことでした。それで「もっと欲しいのですが、石狩でしか売っていないのですか？」と聞かれました。その頃ちょうど札幌の丸善でも置いてくださっていたのですが、私からお送りしようか？と申し上げましたところ、送っていただくのはありがたいのですが、そのようなお店で、安藤牧子さんの絵葉書を」と言ってお買われ行くことが意味のあることなんです。「とおっしゃいました。

私はその時まで、そんなことなど考えたこともなく、「目からウロコ」の想いでした。いろいろお話するうち、私の絵のファンになったとおっしゃって、ある時は植物画の画集も送ってくださり、お手紙には、「この画集も私のところにあるよりも、牧子さんのところにあるほうが幸せかと思っています。年寄りのおせつかいと思って気兼ねなくお受け取りください」とありました。彼女はいつもいいタイミングで私を精神的にも助けてくださるので、とてもあり

さて最初の絵葉書集を出して今年で四年目、そろそろ第二集を作りたいと思っていた頃、街で美しいカラー印刷の絵葉書を見つけました。いろいろ辿ってある印刷会社さんに会いまして、印刷に関する打ち合わせで営業の方と何度もお会いしたり会社にも伺ってとても感じることがありました。営業の方は私の要望を必ずメモし、校正などもお願いしたことは確実に実行され、原画や資料などの取り扱いもとても丁寧でした。ま、これってあたりまえのようなのですが、以前にお願ひした印刷会社さんはそうではなかったんですね。この会社に伺うと、すれ違ふ社員の方は皆さん気持ちよく挨拶して下さり、エレベーターやドアを開ける時も、マナーを心得ておりその徹底した社員教育に驚きました。

あるとき経理係に書類をいただきに伺ったときも、少し時間がかかると思ったのが、丁度来たばかりの夕刊を差し出し「よろしかったらどうぞ」とおっしゃって、いわゆるマニュアル通りではなく、相手の立場に立ったその機転の利いた行動に、感心いたしました。私は花だけではなく人間も大好きで、つい好奇心も手伝って人間観察をしてしまっただけですね。

さてそんな素晴らしい会社で、私がお願ひした絵葉書の出来は？と言った、それが色と質感にとても問題がありました。私の絵葉書は色が命ですから簡単にOKというわけにはいきません。会社の方も問題ありと感じていたようでした。そんなとき「会社にいらしてください。」と言われました。会議室に案内されてびっくりしました。大きなテーブルを囲んで十人ほどの人が立って私を迎えてくださったのです。私がお挨拶しますと皆さんそれぞれにご自分の部署と仕事をとおっしゃって、自己紹介をしてくださりました。そして、ぜひともいいものを作りたいので、どんなことでもご希望を全ておっしゃってください。」と言われました。この方達は写真分解のオペレーターや、直接インクの調合や印刷機を操作する方やそれらの責任者の方で、私の絵葉書集に関係するスタッフの方たちでした。そして、とても真摯に私の話を聞いてくださり、私が持参したいろいろなポスターやアルートの絵葉書も見てくださいました。また工場の印刷機の回っているところへも、案内

集一冊出すのにもたくさんの方々の助けをいただきました。

個展で出会う

さて、今年七月東京でいたしました個展の時の心に残った出会いについて、お話したいと思います。個展初日、偶然通りかかって私の絵を見てくださった、銚子市に住まいのフリーカメラマンの方が「とても感動しました！」とおっしゃって、さらに「植物画はアカデミックな分野で評価されることはあっても、いわゆる美術界からは軽く見られがちです。しかしこれは立派な美術作品、芸術品と認めます。」とおっしゃってくださいました。長い時間絵をご覧になって帰られました。翌日この方からお話を聞いて、三時間かけて銚子から来ました。「と言うこの方もまた、熱心にご覧になりご感想をたためてくださいました。そのまた翌日、フリーカメラマンの方からギャラリーへお誘いで、実に心のこもった長い長いお手紙をいただきました。

個展の一カ月前、私が個展の準備のために東京を訪れたときのことでした。土曜日の昼下がり、ガラガラに空いた電車の中で、私の向かい側に四人の家族連れが座っていました。小学校高学年の双子のような男の子二人と、ご両親が談笑していて、いかに暖かそうなお家のように見えました。私は電車を下りる間際に「私、来月銀座で個展をいたします。よろしかったら見いらしてください。」と言って、春に咲くカタクリの絵



69期の仲間たち

の案内状を、お渡ししました。個展の案内状を持っていくと言ったことで、自分でもびっくりするほど大胆な行動をするものだなと思いました。でもそのとき実は、子供たちにも植物画を見て欲しいな...と思っていたのです。

個展の最終日の日曜日、開場と同時にそのご家族のお父様がいらしてくださったようで、受付の松川宏子さんが芳名帖に「電車の中でお会いたした家族連れの方、愛知からわざわざ」と書き添えていくてくださっていました。

このご家族、一カ月前、私が電車でお会いたした時は東京にお住まいでしたが、この時すでに愛知県豊田市に引っ越されたばかりとのことでした。後日届いたお手紙で感じたのですが、この方は絵にも大変造詣の深い方のように私が自分の絵に對し、これからの課題と想っていたことを思いやりを持った言葉で、すばり指摘してくださっていました。この方も私にとって意義のある出会

いとなりました。

同期の絆

では最後に、今年七月、東京で私の個展をするにいたった経緯について、お話ししたいと思います。昨年東京新宿の東郷青児美術館で世界規模のポタニカルアート展が開かれ、私はその時レセプションにお招きを受けました。このアート展はイギリスの植物学者で、ポタニカルアートの収集家としても有名なシヤリー・シャードウッド氏のコレクション展でした。

その折丁度、69期東京支部の同期会がありました。たまたま持参していた私の原画をお見せしたところ、帰りの車の中で、梅田やよいさんと吉田雄治さんと沖崎剛さんが、「ぜひ東京の人に牧子さんの絵を見せたいから、個展をしよう!」とお願いしました。お酒も入っていたし、酔った勢いかしらと思っていたところ、帰宅してまもなく東京の貸しギャラリーのパブリックがどう

さり送られてきました。

絵を描き始めてたかだか十年で、東京で個展など、とても考えてもいないことでした。私は、三年前に一度だけ札幌のNHKギャラリーで個展をしただけでした。植物画で個展をする人は非常に稀で、私が習ったお二人の先生も個展をされたことはなく、その点でもとても勇気の要ることでした。しかも、どうせするなら銀座でしょうよ!というお話にますます私は臆病になりました。

しかし何度か梅田やよいさんに励まされ勧められ、彼女からの手紙に、とうとう心を動かされました。彼女の手紙にはこう書いてありました。「何かこんなことで、私に出来ることがあれば言うて下さい。私に出来ないことは誰かできる人を必ず探せますから...」と。彼女の手紙は私の心を動かすのに十分な内容でした。東京には素晴らしい植物画を描かれる方が、たくさんいらっしゃいます。「でも北国の、それも石狩の花をお見せできるのは、私だけがもしれない。」そう思って個展をさせていただくことにしました。

実は彼女とは、昔から親しい友人ではありませんでした。彼女とは中学、高校も含めてお互いの存在は知っていたものの、ほとんど接点の無いまま卒業しました。それが三年ほど前やよいさんが、函館博物館の館長の菅原さんから私の「絵葉書をいただきます。」と手紙をくださった。そのとき同封されていたのが、東京白楊だよりでした。それを開くと、なんと私のヤマノボウの作品とパッケージに書いていた工

ツセイが載っていたのでした。正直びっくりしたのですが、彼女の手紙を読んでとても嬉しく思いました。彼女は何年も前からポタニカルアートに興味があり、特に外国のポタニカルアートのカードを集めていたそうです。でも私のカードを見て、今まで大切にしていたそれらのカードが色褪せて見えたそうです。私の絵のファンになつたと書いていました。その一通のお手紙からお付き合いが始まりました。

七月の個展にはやよいさんのご家族、そして吉田雄治さんと娘さんや、同期の仲間が会場の設営から最後の搬出まで、お手伝いしてくださいました。写真が本業の吉田雄治さんは写真も引き受けてくださいました。先ほど司会をしてくださった松川宏子さんは、三 通も丁寧に言葉を添えて案内状を出してくださり、あの笑顔で毎日受け付けや案内をしてくださいました。私の個展のことが朝日新聞の東京版に載ったときもFAXに「やったね!」と大きく書いて送ってくれて、いっしょに喜んでくれました。

長谷川八穂子さんは準備と受付の他に顔のガラス磨きまでしてくださり、大久保節子さんは初日にお赤飯を炊いて持ってきてくださいました。また個展会場では絵葉書を販売しましたが、おつり銭に困ったことがありました。土曜、日曜日は銀行も休みで近くのお店にも両替を断られ困っていたとき、大久保さんのご主人が雨の中カッパを着て、バイクで小銭を届けてくださったのには感激しました。「うちは大

きいお金はないけれど、小銭なららせておいて!」とみんなを笑わせていましたけれど...。家族ぐるみの同期の仲間のチームワークは、傍目にも好感を持って受け取られたようで、後日私に届いた手紙の中で、同期の人の深い絆に感動しました!と、書いてありました。

花と人と共に

こうして振り返ってみますと、植物画を描くようになって、いろいろな花と出会い、美しくて不思議な植物の世界を知り、そして花を介して、また私の描いた絵を介して、たくさんの人たちと出会いました。専業主婦だったら味わえなかつた世界でした。幸いなことにいつも何か困ったとき、手助けが欲しいとき誰かしら手を差し伸べて下さいました。

人は一人では生きていけないのだな...とつくづく思います。もちろん長い年月嫌なことが無かつたわけではありません。でも圧倒的に、嬉しいこと幸せなことが多かったのです。花と出会うって描くことを知り、そして多くの人と出会うって、人の心の温かさをしみじみ感じたこの十年間でした。ますます花も人間も好きになりました。

まだまだお話ししたいような体験や、小説かしらと思つような偶然の出会いなどもありますが、時間になりましたので今日はこの辺で。私の拙い話を最後までお聞きくださいまして、ほんとうにありがとうございます。



随想

我が故郷

— 函館・街・人・思い出 —

私とテニス

37期（昭和10年卒）
室谷 邦雄

学生時代まったくスポーツと無関係だった私が、日銀退職後テニスに幅広く関わりあいを持つようになつて友人を驚かしている。

昭和四十年に千葉県松戸市に居を据えて、テニス初心者が集まつて作った「豊友テニスクラブ」に入会したのが、その始まりである。その時、テニスが老若男女を問わず何時までも続けられることを知り、どっぷりはまり込んで、八十二才の現在になるまで下手同志で楽しんでる。

テニスでキャリアーのない私であるが、初心者の味方となつて、裏方や世話役を引受けてテニス仲間間の輪を広げてゆくのが私の生き甲斐となつた。

三十五年前、松戸市の篤志家の応援を得て、テニスコート三面を

クラブ員の勤勞奉仕で作つた時、激励にきてくれた当時のテニ選手渡辺康二、小西一三、渡辺勲、神和住純の皆さんと昵懇の間柄になり、この人たちを通じ、女子連会長の岡田早苗さん、宮城黎子さんとも知合い、ウインブルドン（全英）、ニューヨーク（全米）、シドニー（全豪）等にも連れて行ってもらい、お近づき願つて貰つて。沢松和子さんがアン清村と組んで昭和五十年に全英で優勝した時に妻と一緒に現地で見物していたのは忘れ得ない思い出である。

平成五年、日本シニアテニス連盟が発足した時、頼まれて北関東五県（千葉、埼玉、群馬、茨城、栃木）の支部長を引受け、現在まで高齢者の試合の世話をしている。

テニス関係の世話役は往年の全日本選手権大会出場経験者の方が多いようで、無名の物好きは少ない。私はその一人である。そのせいか、千葉県テニス協会の推薦で平成五年度の日本テニス協会功労賞を頂戴した。その後テレビや新聞にも時々取り上げられて、友人を吃驚させている。最近では現職当時の金融界からすっかり離れてテニス三昧の毎日である。

地球の半径が六三〇〇kmだから赤道の周囲では約四万kmになる。これにびったり合う輪をかけるとして、この輪の長さを約六メートル延ばすと緩んで隙間ができる。このとき地球の全表面にわたつてできる隙間はどのくらいになるかと問われると、四万kmを6m（正確には六・二八m）くらい延ばしたところ、隙間ができたとしてもせいぜい一〜二cmぐらいのものだろつと考えるのが普通である。ところが全表面にわたつて一mの隙間ができてしまつ。

本年五月、函館で「シニアテニスクラブ」が発足したのを機会に私が会長をしている「フレッシュテニスクラブ」の有志と親善試合を開催した。函中で出来なかつたテニスをこの歳になつて千代が台公園のオムニコートで実現出来たのに大満足している。この親善大会は、今後毎年、函館と松戸で交互に開催することになっている。

また地球上で石を投げ上げれば必ず落ちてくるのが常識であるが、これが秒速8km以上の初速度で投げ上げると落ちてこないで円軌道を描いて地球の回りを回転するようになる。このこととは二百年も前の

この機会に函中出身の愛好者でテニスのグループが出来れば大いに歓迎したい。

地球の半径が六三〇〇kmだから赤道の周囲では約四万kmになる。これにびったり合う輪をかけるとして、この輪の長さを約六メートル延ばすと緩んで隙間ができる。このとき地球の全表面にわたつてできる隙間はどのくらいになるかと問われると、四万kmを6m（正確には六・二八m）くらい延ばしたところ、隙間ができたとしてもせいぜい一〜二cmぐらいのものだろつと考えるのが普通である。ところが全表面にわたつて一mの隙間ができてしまつ。

常識の非常識

40期（昭和13年卒）
相馬 正樹

二トンの時代から分かつていたが、人工衛星として実現したのはそれから百五十年も後のことである。電気抵抗は温度が上昇すると上がり、下がると減少するのは周知の事実であるが、絶対零度まで下げることまで考えたことはなかった。それが絶対零度で抵抗がゼロになる減少を超電導現象と言ひ、一九一一年にオランダのオンネスが発見したが、応用できるまでに半世紀もの歳月を要した。このような例はエレクトロニクスの世界には枚挙に暇がない。納得できるまで追い詰める探求心がなければ歴史を動かす大発明は生まれなかつた。疑問が生じたら直ちに試して見るのが発展の要件である。

（東海大学名誉教授）



トラスチヌ修道院の側道を走る（昭和17年）

六十年後の健康

42期（昭和15年卒）
安富 隼平

六十年前に函中を卒業した。よく長生き出来たものと思つた。同期卒業生のうち47%の方々（戦死者を含む）が逝去されている。

さて、健康情報は巷に溢れているが、関心を払つるのは老人ばかり、若い人は仕事に忙しくて顧みない。健康に必要な条件は食事、休養、運動の三つ、これに酒と煙草と「ミニニケーション」を加える人もいる。私は禁煙と運動（歩行）の二つをクリアしている。年の割に健脚なのは、函中時代よく歩いたり走つたりしたからだと思つた。

その頃毎年、全校生徒40軒歩行競技と10軒駆け足競技があつた。歩行は亀田電停先が出发点で、大野新道を北進、鉄道を横切つて南下する。六時間半で中間の順位だつた。駆け足は柏野練兵場を出發、女子修道院正門前を廻つて電車通りに出る。記録は忘れだが落伍せずほどほどに走つた。

又汽車通学だつたから、朝晩乗り遅れない様によく走つた。汽車通学生登校経路は函館駅から大門まで歩き、満員電車がぶら下がつて千代ヶ岱まで、又は駅前からすしめめのバスに乗つて堀川町まで、それから学校まで歩く。もう一つの経路は五稜郭駅で降りて、ガソリン社の引込線を通り約一時間、相当な強歩で朝礼に遅れない様、汗をかきながら歩く。40期の相馬正樹さんに誘われたのが始まりで、同卒業後もよく歩いた。

ところで、今年の東京の桜満開は四月六日だつた。この日、銀座

の勤め先を午後五時に退出、日比谷公園から愛宕山、芝増上寺と桜を見ながら歩いた。花の匂いに酔いしれて更に赤羽橋から札の辻を通り品川駅まで歩いた。

禁煙については、現役時代何度も挑戦したがうまく行かなかった。それが、停年退職して力ぜを引いたのがきっかけで成功した。これからは少食（腹八分と塩砂糖控えめ）と少酒（一日一合限り）に心掛けたい。

丹治先生を偲ぶ

51期（昭和22年修）
田辺 宗一

学校で、ある学科が好きになるかどうかは、その学科にたいする相性もあるだろうが、教えてくれる先生と自分との相性が極めて大きいと思う。わたしが、こうして英語にとりつかれて、おそらく一生英語から離れられないのも、丹治先生という偉大な師に巡り会ったためだった。昭和十八年函中に入って先生から英語を習うことになった。それから四年間ずっと先生に習った。他の先生の英語の授業もあつたがその影響はほとんどないと思う。と



丹治敏衛先生

（昭和17・12・24・11 母校で教鞭 平成10・10・10逝去）

にかく英語が大好きだった。英語の時間がくるのが待ち遠しかった。家にいても、ひまさえあれば英語を勉強した。日曜日など一五時間は勉強したと思う。予習しているとき、この辺で先生はこういう質問をするなど大体予想がついた。この不定詞は何用法だ？とそれ来た。何人かにあててわからないと、わたしに順番が回ってきた。どうして英語がそれほど好きになつたか、その理由はよくわからないが、しいて言えば、先生の授業には文化的な香りがあったように思う。試験中、一五分くらいで答案を書き終わって返屈しているとき、できた者は裏に暗記した本語でもそうだが、外国語の場合特に、長い文章をまるごと暗記することは最高の学習法だと思ふ。あれから五〇数年経つ今でも、一年のリーダーの文章が口をついて出てくる。通知簿の英語の評価は、それだけは判がないのか、ペンで秀と書いてあつた。本のない時代で、戦後まもなくだつた）先生から貴重な蔵書をお借りして読んだ。アーヒングの『スケッチブック』、ロビンソン・クルーソー、ハーツの短編集など。先生の歩かれた道をたどるようになつた。高、東大の英文科に進む間も、札幌までお伺いしたりして、先生との縁は続いた。四年前、鶴ヶ峰のお宅に伺つたら、八十二になられた先生は英文学関係のものを翻訳されて

いた。そして手許の本のある箇所を指して「これは誤訳だ」とその理由を説明してくださつた。それを聞いて、わたしも五十年以上英語を勉強してきたが、先生には到底及ばないと思つた。昨年お伺いしたときは、楽しくてつい四時間もお邪魔してしまつたが、その間に「兄弟

は？」とよんへんも訊ねられたのはびっくりした。先生が亡くなつて今年の四月お伺いしたとき、奥様から、いつも教え子の自慢をしておられたこと、夜の白むのも気づかずに授業の下調べをしておられたことをお聞きして、あらためて深い感動を覚えた。

（金沢大学名誉教授 研究社「新和英中辞典」編者）

棋士生活五〇年

52期（昭和25年卒）
二上 達也

夢に現れる将棋の局面は、何故かいつも私の必勝形である。

対局相手は大山康晴十五世名人のようにも思えるが、顔に影が差していて、はつきりとは分らない。投了に追い込んでやろうと思ひ、やる心そのまま決め手を指すと、これが大ボ力。汗をぐっしょりかいて目が覚める。こんなことがちよくちよくあつた。今もベットや車の中で将棋の局面が脈絡なくつと頭に浮かんでくる。

名人を目指し函館市から東京、プロ棋士として第一歩を踏み出したのは昭和二十五年（一九五〇年）。当時は棋士というより、将棋指しなる表現がびつたりの人が多かつた。一部の人には博徒の一種くらいに思われていた時代である。棋士



ならば皆、まずプロを目指す時に家族に反対され、結婚相手の両親には自分の職業を理解してもらつたのに苦勞した経験があるはずだ。無論私も例外ではない。

今年で棋士生活は半世紀たつた。現役を退いたのが十年前である。宿願の名人は逸し残念な気持ちが残るものの、棋聖四期、王将一期のタイトル戦績にさほど不満はない。一流棋士の証明とされる順位戦のA級には計二十八年間在籍した。

社団法人日本将棋連盟の会長職は現在六期目で、これまで十一年間務めてきた。日本将棋連盟の定款ではまず棋士同士の選挙で理事を選び、その理事の互選で会長を選出する。理事職も六七年以来、合計で三十年近くになる。盤上一筋というわけにもいかない棋士人生だつた。

もともと暢気で甘えん坊気味の性格であり、組織の長になる器ではないと自分なりに思っていた。その考えが少し変わったのは三十歳を過ぎてからである。

ある日、関西本部で升田幸三実力制第四代名人と、愛棋家で作家の藤沢桓夫氏が話し込んでいる部屋を偶然通り過ぎた。その時藤沢さんからあつ、未来の連盟会長かと声をかけられたことが印象に残っている。同時に、ニヤリと口をゆがめて笑つた升田さんの顔も、他人からそういう評価を受けていたのかと意外な気がしたものだ。

この半世紀は、将棋指しから将棋棋士へ脱皮する時間だつたのだらう。もう一般社会で、市民権を得たといつても非難されまい。それも



大山名人とのタイトル戦は20回を数えた（右が筆者）

先輩・同僚棋士の努力もさることながら一千万人を超える将棋ファンと、棋譜をファンに提供する各報道機関の惜しみない支えがあればこそである。感謝の念に堪えない。

とりわけ羽生善治四冠若き世代が活躍するようになつてからの変化が目覚ましい。羽生は私の弟子であるため面はゆい気もするが、最近のように国立大学や一流私大に通いながらプロ棋士を目指すといつたことは、以前ならば想像の外だつた。

もともと伝統文化の地味な世界だが、今まさに変革期にあると感じられてならない。

しかしゲーム感覚で対局する若手が増えるのを見るにつけ、将棋の真の魅力は人間くささに満ちた人と人とのぶつかり合いにあると思ひが強くなる。かつては奇人変人の集まりのように見られてはいたが、だからこそファンに喜んでもらえる名勝負が生まれた。またいつたん将棋盤を離れば棋士はみな身内と

いつた意識もあつた。それが今は薄れつつある。

もともと棋士にとつての履歴書は棋譜であると考えていた。私たちが第一の使命はいい棋譜を後世に残すことである。それゆゑ、回想録には興味がなかつたのだが、変革期にある今だからこそ、棋士としてあるいは運営者として見てきた中から書き残すべきことは残したいと強く感じるようになった。この五十年間、勝負の場の内外で起きた色々な出来事が、皆さんの興味を引くようにであれば幸いである。

（日本将棋連盟会長）
日経新聞「私の履歴書」より

諸先生方に感謝して

54期（昭和27年卒）
杉田 博子

昭和二十五年四月押しつけられたような共学制度に不意なまま私も中部高校へ転校した。急に決まったのかその辺の事情は分からなかつたが学校では女子トイレを作っている最中であつた。地区別に東西、中部と分けられ藤立高女から来た私達は女学校が恋しくて授業が終ると、高女へ残つた友達に会うために現在の西校である高女まで電車に乗って遊びに行き、日が暮れる迄おしゃべりをして帰つた。

野蛮な感じの男子生徒には、なかなかなじめず、体育の時間にフオークダンスをするから集合と云われると、男性群と女性群が校庭の端と端に別れて集まるといった状態であつた。

初めての共学の生徒に先生達もどつしたら自然に仲良く出来るか色々考えられたことでしょう。そんな先生のお気持ちも考えずに、

箸が転んでもおかしい年頃で、女生徒だけでふざけて笑いころげていた。時々小耳にはさむ「あの先生はこわい。あの先生は生徒を、並べて平手打ちをした。」という話に「そんな事はない、私達にはあんなにやさしいのに。」と思う事もしばしばであつた。ほんとうにどの先生もやさしかつた。

初めての担任の岩沢先生はラグビー部の顧問であつたせいか、工業高校までラグビーの試合を見に連れて行つて下さつたり、日曜日には、大沼公園に級全員で遊びに行つたり、いろいろと心遣いをして下さつた。

解析の時間は、ひとクラスに女生徒が廊下側に一列しか居なくて緊張して授業を受けていた。有江先生は問題を解くのに例えばと例をあげる時私の名前を使う。すると後の方の男生徒達から口笛がとび、クラスの中がなごやかな雰囲気になる。そうしている内に中部高校に馴れて来たのか、西校まで行つてのおしゃべりが遠のいていったが、相変わらず早く家へ帰つて勉強するわけがなく、夕方になる迄学校で遊んでいた。

期末試験になると近所に住む綾ちゃんの家泊つて勉強したものだ。男子生徒とも、だんだんおしゃべりをするようになり、女学校時代のあだ名が乱暴な呼び名に変わってしまった、おだ名でしか呼んでもら



だ名でしか呼んでもら

えなくなつた。体育の時間に出席をとる時、春木先生までが私の名前の所になるとあだ名になつてしまつた。高三になる頃には、いじめつ子も、いじめられる子もなく仲の良い学年になつた。先生達も、きつと安堵されたことでしょう。

高三の五月修学旅行の時、みんな仲良くなりすぎたのが先生の言葉も耳に入らず、我れ先に列車の席をとり合つたら担任の浅間先生に一喝入れられ、先生は怒るとこ

わいんだと驚いて反省した想いもある。相変わらず騒いでばかりいる子に手を焼いてか将来のために大学へ行つた方が良く自宅までいらして下さつた浅間先生だつた。当時私のまわりには受験勉強をしている女生徒は居なかつた。あくまでも私のまわりにはである。不肖の子ほど親は可愛いといひます。卒業してから浅間先生は、工業学校の先生との縁談をもつて来て下さつた。それも断つてしまつて、「先生ごめんなさい」。私が横浜に住んでから、先生は上京なさると電話を下さり、学年の友達に連絡して、よく食事をした。

豊岡先生は、五・六年前の函館での同期会で、「あんなはちつとも変らぬ。制服着せたら昔と同じ



だ。」とおっしゃつた。先生もお年をとられて目も大分悪くなられたようだ。いずれにせよ初めての共学にいろいろと御配慮下さつて可

愛がつて下さつた諸先生方も今は、おおかたいらつしやらない。生前感謝を申し上げれば良かったのにと悔やまれてならない。諸先生の期待どおり中部高校でつちかわれた友情は今でも強い絆で結ばれているのが嬉しい。故郷へ帰れば気の合った同志が集つてくれたり、関東地区の同期会にはわざわざ北海道からも集つて来てくれる程盛會である。来年も一人も欠けずに集ろうね。といつて解散するそんな年齢になつた。みんなが幸せな余生を送れるようにと祈る昨今である。

親父の葉書

62期（昭和35年卒）
西野 鷹志

旅館の前を行つたり来たり、入るべきか入らざるべきか、ハムレットの心境。木造二階建ての古びた民家だが、玄関の小さな看板は連れ込み宿の風情そのものだ。意を決し裏木戸からそつと入つた。

昭和十六年十一月、風雲急を告ぐ真珠湾攻撃の二十日ほど前、東京府三鷹村牟礼三七九番地で、生

まれた。ヨチヨチ歩きの僕がオシツコをひっかけても、かわいがつてくれた近所の宿屋のおばさんが今も健在のはず、大学に入学したばかりのころ、ぜひ訪ねると親父が強くすすめた。

吉祥寺に近い井の頭公園の池の辺から歩いて一分、生まれた借家があつた。八畳と六畳に台所の一軒家は、朽ちかけていたが親父がいう昔の原形を残していた。つぎに探して来た、おばさんの宿屋は連れ込みに変身、でも訪ねて良かった。函館の西野です、むかし、父がお世話になつたと挨拶したとたん、こちらをまじまじと見つめるおばさん、ああ……あなた、たかしちゃん、たかしちゃん……。帰りに、下宿暮らしと知つてお菓子とインスタントラーメンをどつさり持たせてくれた。

昭和十四年から五年ほど、太宰治は、三鷹下蓮雀に美知子夫人と新居をかまえ、生涯でもっとも平穩な時をすごし規則正しく創作に打ちこむ。太宰治は青春のはしかのごとく若いころに熱中する小説といわれるが、このころの代表作の一つ、「津軽」は今も愛読の一冊



太宰治とこどもたち

だ。太宰と同じころ、ごく近所で同じ空気を吸っていたという勝手な思いかも知れぬが……。

鷹志が僕の名前。親父は出生地の村名から鷹を拝借。さらに、節操のある人は、窮しても不義の財をむさばらないことのとえ、鷹は飢えても穂をつまず、を辞書でひき、その心構えで人生を志せ、と名づけた。いまもって重たい名前だ。

東京遊学中、酒を飲む金が底をつき、「オクレ」と実家に電報を打った。親父から速達で「鷹は飢えても穂をつまず」と葉書に一行

住んでみたアメリカ

63期（昭和36年卒）

山崎 良英

二十十年位、仕事柄、年に数回アメリカに出張する機会があり、何となくアメリカが少し分かつている様な気になってきた。しかしひょんな事から勤務していた合併会社からアメリカにある合併会社の親会社へ

出向する事になり、定年間近にしてアメリカに単身赴任するはめになってしまった。以下は、住んでみたアメリカの経験であり、アメリカを御存知の方には、どうという事のない事であるが、私にとつての悪戦苦闘記としてお許し願いたい。

私が現在住んでいる町は、ノースカロライナ州ロッキーマウンツという人口五万人と見てもそんなに居ると思えないが、小さな田舎町である。人に説明する時に何とも説明がつかず困っていたら、この町のPR誌には、次の様に書かれている。「ニューヨークとマイアミの丁度真中の街である。彼等も人に聞かれた時に答え様がなく、こんなフランスになったのだから。とにかくアメリカの東海岸の真中あたりで海（大西洋）から車で約一時間程入った所である。」

この国で仕事をして給料をもらう為には、まず労働ビザが必要で、これは会社がその本人の経歴に鑑み、どんな仕事上の必要があるかを説明して、移民局に申請するの

であるが、かなりの枚数の説明書が良いとしても、卒業証明書と成績証明書を添付する必要がある。英文の証明書が現在すぐ貰えることが分つたが、「あまりの成績の悪さ」に、これでは許可がおりないのではないかと思つたのは番外の混乱であつた。とにかく弁護士に何度か修正してもらいビザがおりたのは三カ月後の一九九九年六月の末であつた。入国にあつて書類も観光ビザと異なるし、出される質問も勤務場所や役職等であつたが、何とかクリアし入国手続きを終えた。

かくして私もアメリカ勤務の労働者の地位を得た。しかしこれからは、ソシアルセキュリティ（社会保険と訳すのだろうか）というシステムがあり（ある種の国民背番号である）何をすることもまずこの登録をしない限り、社会生活は皆めない仕掛けになつていく。家の賃貸、銀行口座、給与受取り、車の購入、免許（*driver's license*）の全てにこの番号が必要になる。会社でどうやって申請するかを聞いたが、どうも皆んな良く知らない様であつた。後から考えれば当然の事だが彼等は生まれた時に番号を持つており、多分彼等が申請した経験はないのであろう。とにかく、そのオフィスへ行くと云われ、地図で場所をチェックして出向き、なんとか申請書を出すと、二週間位のうちに書類が郵送されるよ」と云われておしまい！そこからはやはりきちんとしていて十日目位に待望のソシアルセキュリティカードが届いた。ちなみに私の番号は「241-91-3448」である。

前述の「ザ」の番号「241-91-3448」

始めて会社の雇用関係の書類が有効となり、ようやく就職して給与をもらえる事になつたのは、アメリカに入国してから三週間後であつた。

こうやって雇用関係を締結し、銀行口座やクレジットカード等、日常生活に必要な手続きでさらに三週間程必要であつた。ここ迄は何とかクリアした。

日常の生活は当然の事ながら全て英語で、これが又南部なまりでいまだに良く分らない。しかも会社の中に日本人はひとり、街中にはほとんど日本人が居ない環境で生き延びるのは、結構プレッシャーがあるが幸い電話やメールで、アメリカに居る同僚達と話しをする事でストレスを解消している。

これはこちらで聞いて分つた事だが、南部とはワシントンにあるポトマック川より南を指すのだそうで、バージニアから南は全て南部になるとの事、南北戦争の南軍の将、リー將軍の家は確かにワシントンのちよつと南にある。

かくして約一年三カ月程、アメリカで生活しているが、一般論として黒人やヒスパニックの問題、セクハラの問題等、皆さんもニュース等で聞かれるであろうが、住んで見て感じる事は、この大國を構成する多くの人種を束ねていくのは大変な事で、全ての人が表面上平等である為には、差別を排除



するしか方法はないと思われる。これは白人の善意ではなく、國を保つていく為の智恵だと思ふ。言葉を替へれば白人を中心として、この國を運営していく為には、全ての人を輪の中に入れて共存する事のみが唯一の手段という事である。

地元の小学校へ参観に行く機会があり、五年生のクラスで質問が出た中で、「あなたの祖先はどこから来たか」という質問があり、この國の人種問題（人種についての考え方）を見た気がした。日本人の様な単一民族では考えつかない発想と思つた。アメリカについて分つた様な事をいっつもりは全くないが、全ての人にオープンで、正義を基調とする透明さを原則とする社会は、それなりに魅力的であるが、一方で貧しい人も多くこの小さな街でも、年に一五人位の殺人事件がある現実もあり、考えさせられる事も多い。教会のつながり、地域とのつながり等また社会の横系は十分分つてないが、住んでみて、やはり、「世界一の環境とパワー」の國だと感じている。

第37期・十楊会

室谷 邦雄 記

函中時代教わった先生の唯一の生存者である萩原獅郎先生(九十一才)を迎えて、五月二十四日、日銀鳥居坂分館(六本木)で恒例の同期会を開催した。参加者は次の七名、みんな八十二才以上である。相変わらずポプラ魂の話に終始した。

浅野増太郎、釣谷光博、加藤孝一郎、山口一三、風間憲吉、鈴木克己、室谷邦雄

なお、この機会に、「函中同窓松戸会」のことに触れてみたい。

この会は昭和六十一年に結成され、一時中断していたが、四、五年前から復活して毎年六月に開催している。本年は六月十七日(土)夕刻、松戸市ニューオータニで開催した。参加者は次の十名。世話人は小野寺君(電話〇四七 三八八 〇四八六)

室谷邦雄(37期)田中昭吾(49期)小野寺吉彦(51期)鈴内克洋(56期)中森勲(63期)原恵子(66期)西野翠(68期)梅田五郎(69期)梅田やよい(69期)谷口雅典(72期)

第45期・翠楊会

田沼 修二 記

例年通り、今年も六月十七日(土)午後NHK青山荘で翠楊会東京支部総会を開いた。旅行や他行事との重複、それに体調不良の欠席者が多く、十五名が顔を揃えた。

今年に入って四月に札幌の東山崎君、東京の小西君、そして六月に函館の福土君と同期でも元氣だった諸君が相次いで鬼籍に入った。

会は乾杯のあと幹事から経過報告があり、故人の思い出を語り合い、出席者の近況報告に移ったが、一頃の子供や孫の話は聞かれず、専ら体の故障の話題が多くなってきた。

近況報告を続けているうちに、たまたま上京中の橋場邦武君から電話が入り、これから出席したいという。橋場君は二高、東大を経て長崎大学医学部に勤務、現在名誉教授をしている。程なく到着した橋場君は六十年前と顔形も体型もあまり変わらず、忽ち旧交を温める話題に変わった。

橋場君がアメリカに留学し、学んだ教授はアイゼンハワーの主治医を勤めた著名な学者で、その先生に教えられたのは、「きちんと管理すれば、人間は八十五才まで生きられる。しかし八十五才から先は神様の思し召し次第だ。」平均余命に近く、体の故障や鬼籍に向かう友人も増えつつある折から、示唆に富む話題であった。恒例の校歌斉唱と記念撮影をして午後四時散会した。

第46期だより

渡辺 保二 記

毎年行っている恒例の同期会は昨年一月一三日有楽町のニュートーキョーで行った。我々もだん

だんと高齢になり合せて物故者や病床にある者が増え淋しく感じる今日この頃です。昨年の同期会は出席者は一五名と少なく欠席者の近況報告では本人か奥様が病氣療養中と書かれているのが目立ち心の痛み思いと同時に一日も早い病状の回復をお祈りする次第である。出席者は少なかつたが一昨年物故された橋本晋一君(元早大ラグビー部監督及び社会人のセコムラグビー部監督)のご夫人ミドリさんが遠路函館から出席され晋一君の思い出話などを皆でしたが男ばかりの同期会に花を添えてくださり感謝している。話題はやはり健康談義が中心であったが郷土色豊かな料理と美酒で気分も満点。最後に函中校歌「玄冥の北の一道」を合唱し笠島秀夫君の三本締めでお開きとなった。来たる平成一六年には卒業六〇周年記念大会が函館で開催されるが私もその年には七九才になる。

一層健康に気をつけ是非参加したいものと今から楽しみにしている次第である。

第47期だより

松村 豊 記

例年通り、有楽町・ニュートーキョーで同期会を四月七日に開催。今年には都合がつかない人が多く十七名の参加になりましたが賑やかな一時を過ごしました。札幌からは例年参加の成田さんが、又一年だけ在学の藤原さん

(東大名誉教授)も顔を見せてくれました。

来年からは、例会はお昼の時間に変更することにしました。また最後?の全体の同期会が、鹿部で六月に開催するので参加して欲しいと連絡しました。

六月十八日、全体の同期会が、鹿部ローヤル・ホテルで開催されました。参加者三十八名。石橋宏旭川医大名誉教授による「鬼の話」を約一時間聞いてから、旧交を温めました。東京関係からは、十二名出席しました。翌日は希望者によるゴルフコンペもあり、卒業後五十五年を経た同期会も、無事終了しました。

出席して楽しい会話に打ち興じていた藤田光義さんが翌夕日に心筋梗塞で急逝されました。心からお悔やみ申しあげ、ご冥福をお祈り致します。残念です。

古稀を過ぎ、人生の転換期に当たってきている同期の皆さんの健康勝をお祈りしながら筆をおきます。

第51期・あずまし会

三國比左男 記

今年のおずまし会総会・懇親会は、四月二十二日午後五時から日比谷「聘珍楼」で、会員十九名が参集して行われた。

総会では、会務・会計報告の後「二〇〇一年東京大会」(51期の全国大会で、あずまし会が担当)の協議に入り、どんじり会新世紀大会」と銘打って、平成十三年十月十八日

に「箱根プリンスホテル」で開催することを決定し、とりあえず実行委員長に元氣になった山田副会長をあたえ、実行委員会を組織して諸準備を進めることになった。

懇親会では、金沢大学名誉教授田辺宗一君の乾杯が始まり、恩師や旧友の昔話、病氣や孫のこと、果ては政治・教育問題等々談論風発三時間、恒例になった小野寺会計幹事の三本締めでお開きとなったものの、語り足りない面々十一名が、二次会場でカラオケもやらずに語り通したのであった。

第54期だより

佐藤 正郎 記

石狩当別町スエーデンヒルズの查香荘に総勢三九人。うち道内からの出席者は二三人、それでも東京地区同期会に変りはない。わが期は些事に拘泥しないのである。

ここはトーモクの施設。トミタ君のご厚意による。石狩湾に近いだけあって、夕食は新鮮な海産物が卓を埋める。島根から参加のトリー君を皮切りにスピーチ。そのうちに、「一組集合」の号令。クラス毎に写真を撮れとの注文である。「わがクラスは十一人出席だぞ。」「烏合の衆だな。」「バカ、結果が固いんだ。」「あちこちに車座。無統制に大声と大笑いが弾ける。帰宅の必要がないとなれば、お喋りと笑いは果てしない。最終は午前三時。還暦を半ば過ぎてても胃袋と体力は十分なのである。

朝のスイーデンヒルズは、薫風が梢をなぶり、木の間隠れにスエーデンハウス。一二〇万坪のうち五〇万坪がゴルフ場、残りの三分の二が森林だという。ゴルフ場の食堂で朝食。練習グリーン前で写真を撮ってから、ゴルフ組と観光組に分れた。

観光組はバスで札幌經由小樽、札幌駅前と大通り公園には、異様な風体のグループが幾つも屯していた。彼らは、よさこいソーラン祭の参加者である。爆発騒ぎの朝のことであった。

小樽、青山別邸から裕次郎記念館・マイカル。オルゴール堂隣の大時計を湯気が包む。「温泉卵は知ってるが、温泉時計は初めてだな。」蒸気時計。世界で二番目だった。「北一ガラスの巨大な喫茶室で、ランプの下でのコーヒーと談笑。話はずきないし別れ難いが、そつもいかない。」

「来年は東京ね。」来年も行くからね。「札幌駅での別れは、明るく爽やかで、そしてひとときわ騒々しかった。」

第55期・函中二八会

加藤 富藏 記

平成二二年度の支部総会並びに懇親会が、梅雨空の六月二四日(土)午後五時半から、品川駅前の品川大飯店(中国料理)で、恩師青野明義先生を迎え総勢二六名が集い、賑々しく開催された。

まず、総会では、栗崎支部長からの挨拶に始まり、支部の活動状況を報告し、次いで今回欠席者からのメッセージの披露、久方ぶりの出席者から近況報告がなされたあと、

引き続き懇親会に入った。

懇親会は、例年のとおり、よく飲み、よく食べ、大昔の思い出話某氏曰く、カビの生えたムカシを引張り出しての懐旧談(同感である)に花を咲かせていた。満腹になつたところで二次会となり、所用のある青野先生達三名を除き、全員がカラオケ組(ホテル本館B1)とパーラウンジ組(新館39F)に分かれ、大いに歌い、一方では酒と談話に打ち興じ、夜も更け、次回の催事で再会することを約し散会した。

ところで、本年三月三十一日が誕生日であるS氏を最後に、同期全員が満六五才以上となつた。

満六五才になると、所得税では老年者控除が適用されるのをはじめてとして、老齢基礎年金受給開始、老人医療費助成受給、介護保険加入など、いずれも所得制限があるとはいへ、福祉政策の恩恵を受けることになる。反面、「老害」、「棄老」等にみられるように批難の対象となる年代の始まりでもある。いずれにしても、最終ラウンドの大きな節目にあることは否めない。これまで元気でやってこられたことを親や社会に感謝し、これからは、可能な限り社会奉仕に心掛けたいものである。

第63期・午末の会

小林 嘉則 記

今年で18回目を迎えた東京同期会は、八年続いた有楽町から場所を変えて七月八日(土)信濃町のレストランで開催。幹事が多忙を理由にはがきでの案内が出来なかつた為、何人かの仲間を手分けして電

話・ファックスでのお知らせとなつた。連絡網のおかげで夫々声の伝達が功を奏したのか、七八年振りに出席した女性もいて三名程の集まりになつた。いつもは函館や札幌からも出てきてくれる人もいるのだが、そんな訳で連絡もしないで申し訳ない旨紙上を借りてお詫びします。今回もいつもの常連、三重から橋本さん、京都の本城さん、六年ぶりに大阪の橋爪さんも顔を見せしてくれた。久しぶりのわりに変わりなく若々しい平間さんと三谷さん。札幌から戻つた三好君は八年振り、頭は真っ白なのに顔がやけに若いのは気も若いせいか?とはいうものの我々も卒業四、五年の五八才となれば、いよいよ第二の人生を考ふる時期でもあり、昨今の状況を見渡してみるとこれまた結構大変な時を迎えているようだ。あと二年位は生きていかなければいけない

いから、老後の楽しいプランを立て様と思つても世の中の変化予測が難しい為なんの意味もない。まあそんなわけで日一日を大事に、会える時がその時と思つて過ごしたいものです。恒例の秋の旅行会は11月25日(26日)で国宝彦根城を訪ねての紅葉めぐりが計画されている。今年で一五回目、これだけ続けてこれたのも依田君の様なプランナー兼インストラクターがいればこそ……感謝の気持ちを含めて楽しい旅にしましょう。

第64期たより

泉 清美 記

昨年九月の同期会は、佐渡谷君の個展に併せて開催。歌舞伎座横のワインレストランに四〇名、うち函館からは、十三名が参集して、函館の香り(訛り)を届けてくれました。令夫人同伴の人もいて、この会もますます家族的になつて来ました。同日に佐々君のミュージカル出演が重なる参加者は減つたけれど、それぞれ色々な楽しみ方があるもの。昨年は、それだけでは終わらず、十一月に、紅葉真っ盛りの秋田で三三同期会、在住の川上、宮古、渡部の三君の尽力で開催。これまた東京から山崎、佐々、徳田、浅野、泉、関、函館から、川崎、小林、村上、中村、才門、佐渡谷、札幌から、前、河原木の面々が参加。宴会場は秘密とされていたので、全員が三三バスに乗せられて、とある場所へ。どこへ向かっているのか、久しぶりに脳細胞が刺激を受け、着いた所は、渡部邸。秋田名物しよつる鍋、きりたんぼ鍋と旨い酒……で心地

よく酔いました。秋田在住の三君の奥さまに感謝。渡部邸の温室から大根やらジャガイモをお土産に頂きました。翌朝は、千秋公園を散策。芝生に輪になり、名物団子を食べながら(上品な甘みでもっと食べたい)佐々君のカツオネに耳を傾けたのであります。函館組は反省会を開いたと、その日の献立表を送つて来ました。牡蠣、焼豚、秋刀魚、昆布サラダ、しめじのクリームチーズあえ、等々。東京組は帰りの新幹線車中で安い切符代で浮いた一万円を、車内販売の酒を買い占め、あーあ、これが東京まで延々と続いたのであります。翌日秋田は、初雪。でも、参加者の誰もが「楽しかった」、「また行きたい」とのこと。秋田の三君、また宜しく。

最後に、佐藤(宜)が二〇〇〇年シドニーオリンピックの開会式に、日本選手団の団長として入場します。テレビでお見逃し無きよう声援



してください。
今年の同期会は九月十五日、大沼の水テール白樺で。温泉で若返り、二二世紀の生き方を駒ヶ岳を見上げ、語り合います。

第65期・函中三八会

菅原 大作 記

今年の函中三八会は、七月一日(土)、午後六時より、東京・中央区の芙蓉・銀座クラブで行われた。当初予定の二五人が、飛び込みもあり、女性二人、男性一人の計二十八人が出席。今回は、アメリカ赴任中の杉村文三郎氏がたまたま帰国中で出席したほか、青森から谷川(旧姓・松本)ミナ子さん、茨城県高萩市から田所(旧姓・坂口)ナミ子さん、山梨県若草町から栗田(旧姓・川田)志津江さんが出席した。参加者には、欠席者からの近況報告と、最新の住所録を印刷して配布した。



午後六時開宴予定も、なかなか全員が揃わず、来た順に飲み始めた結果、会を始める頃には出来上がる人も。結局、開始は、午後七時近くとなった。

会では、最初に今年五月六日に急逝された塗師哲夫氏に、全員で黙祷を捧げた。

続いて、全員に自己紹介を兼ねたあいさつと近況報告をもらったが、昨今のリストラの影響で勢のない男性陣に比べ、子育てを終え、これからは自分の人生と張り切る女性陣に圧倒されていた。

今回は、立食だからため、会場内では幾つものグループに分散して相互交流が盛んに行われた。そして、それぞれが恩師の思い出や授業中のエピソード、修学旅行や部活動、クラスメイトや遊び仲間、仕事や家族のことなどを話し合っていた。

午後八時過ぎ、記念撮影し、次の再会を約束して閉会となった。しかし、なおも別れがたく二十数人が二次会へ。二次会では例年と同様にカラオケショーと卒業以来の間隙を埋めるためのお互いの話が續いていた。

第68期だより

木戸 正文 記

毎年六月の第二土曜日を『よいよい会』を開催する日と決めている。今回は梅雨入り宣言のでた六月十日(土)午後五時半よりアルカディア市ヶ谷で行われた。総勢二五名が雨の中参加してくれた。初参加は出口浩司、坂口正軌、相馬亮君の三名。出口君は今年転勤になり東京に戻ってきたとのこと、坂口君は

西宮市在住、出張中の時間を都合して出席してくれた。和気あいあいの中で、次のような近況報告があり、旧交をさらに深めた。

荒谷、ロシア、プーチン大統領の出現により、強いロシア指向が強まり水産物、特にサンマの価格が上がりそうである、市場に出ているサンマ、イワシ、サバは全て天然物であり、健康のため、大いに食すべきであることを強調

奥野「人生五十年、これからは余生。新しい函館を創るために帰る、社会貢献をしたい」

及能、自社でアルミ製のラジキタを開発した、日産、スバル等から引き合いが来ている

児玉「JALにて発券業務の仕事をしている。ツアーの企画等あれば任せてほしい、営業ポイントになる」

長崎「数学の教師として、最近偏差値四十台の子が大学に来るようになった。十数年前には考えられないことだったが、対応に苦慮している」

帰山「ソニーでミュージックディレクターとして三十年勤務した。音楽と人間の関わり合いを故郷で追求したい。函館での活動場所を探している」

相馬「車のメディアの仕事をしている、今南北朝鮮友好ラリーの企画を進めている」

三浦「橋梁関係の仕事をしているが、青函架橋計画の話がある。函館側はあまり乗り気ではないらしい」

細野「社会福祉の仕事をしているが知的障害児に対する、国、都の対応について」

丸山「新しい睡眠薬の開発に成功した。癖にならないのが特徴」
等々興味深い話が続々...

最後に今回も幹事の役を担ってくれた、大河原、西野さんに感謝し、山本副会長の発声により、フレー、よいよいいよいよでお開きとし、二次会へと向かった。

第69期・火ばしら会

梅田やよい 記

火ばしら会東京支部の第十四回同期会が、七月八日(土)に、数寄屋橋のロチェスターで開催されました。

初参加は、折良く札幌から出張中の安田文夫君、札幌から単身赴任中の沢村雄司君、遙か鹿児島から台風をすり抜けて来てくれた林(野水)千恵子さん、伊勢原市からの山原千絵(小川千衣子)さん、そして入学した年一年間のみ在校生、その後転校して以来、三十五年振りの再会!という中川正見君の五名、それに大阪から佐々木紺野(茂子)さんも駆けつけてくれて、総勢三十一名が、午後五時半から十時すぎまで休む間もなくしゃべりまくり、アツという間の超!賑やかな一夜でした。昨年初参加の太田純一君が、在学中に創立七十周年記念でもらった、校歌のソノシートを今回録音して来て下さり、終りにみんな二度も、懐かしい校歌を歌いました。私たちの「火ばしら会」は、この校歌の歌詞の頭から命名したクセに、よく考えたら、東京の同期会で校歌を歌ったのは初めて(?!)かもしれません...

そして仕上げの三次会は、鹿児島



島・北海道・大阪からの遠路遙々組を中心に、近くの帝国ホテルへ。レインボーラウンジでゆつとりとカクテルを飲みながらの一時を過ごして、シンデレラ時間になって、お開き という結末でした。来年はどんな顔ぶれが揃うかな...?、今から楽しみです。

第101期

高橋 令恵 記

高校を卒業して以来、久しぶりに会った人もいて、同窓会で懐かしい昔話に花が咲いてよかったです。また、普段話す機会も少ない先輩の方と接する事ができて貴重な体験をしたし、ためになる話を聞いて頂いた。これも同じ、函館中部高校という共通の思い出があるからこそだろう。

最後に同じ年代のOB、OGが増えていけば関東地区の同窓会ももっと活性化すると思う。



(平成十一年九月以降)

三國 栄徳(36期・昭9年卒)

白楊だより22号多謝。22回大会出席者名簿に期友 松原・出町の両名拝見 喜びにたえません。小生神経麻痺障害益々拡大悪化、下半身不随の状態、生ける屍と同じ情けない事ですが老兵は消え去るのみ。後輩諸君、日本再建の為に御活躍を希求する。皆様健康で頑張って下さい。

佐々木八郎(36期・昭9年卒)

皆々様のおかげで何とか元気に過ごさせていただいております。年と共に行動範囲は狭くなりました。榎田 和彦(39期・昭12年卒)

今年5月旧制高校のクラス会で上京した際、尊敬する室谷邦雄先輩に会って頂いて感激致しました。亡き兄と5年時同級でした。函中生にスリッパした様な思いでした。4月に39会の増田久兄が急逝されました。救急車の中だったとか、残念なことです。

今井 清(40期・昭13年卒)

東京白楊だより22号楽しく見ました。第一頁の五稜郭の写真に始まり、ノンフィクション作家森本貞子さんの記事でも函館は実に史蹟に富む町であると強く感じさせます。

文芸春秋に先月号まで連載された吉村昭「夜明けの雷鳴」は函館戦争での樺本方の医師高松凌雲の物語で、当時の函館の様子が描かれており、毎号読むのが楽しみでした。室谷 国男(40期・昭13年卒)都合悪く出席出来ません。皆様の親睦と健康を祈ります。来年度を期待して、……。

藤原 豊治(40期・昭13年卒)

喉頭全摘出による音声機能障害(身体障害3級)、旅行は困難です。支部大会のご盛会をお祈りします。

井上 勲(40期・昭13年卒)

『東京白楊だより』だんだん充実して毎回楽しみにして居ます。今後とも頑張って下さい。

須永 静清(40期・昭13年卒)

今年は八ヶ岳美術館より声がかかって、8月23日から9月5日、個展をやってみました。

飯島 繁(42期・昭15年卒)

ひさしぶりに出席したいと思ひます。よろしく。

神山 茂郎(43期・昭16年卒)

10月22日(金)東京支部会出席します。色々と御苦労様です。

有田 正也(43期・昭16年卒)

今年はお出致したいと思ひますが、病院の改築作業で手が離せません。皆様によろしく。

吉江 彰(43期・昭16年卒)

日頃いろいろとお世話になり厚くお礼を申し上げます。今後共よろしくお願ひ申し上げます。

庄司 荘一(44期・昭17年卒)

高田屋嘉兵衛の銅像が鮮明で感銘。

高倉 隆(44期・昭17年卒)

懐かしい函館、思い出深い北国の故郷、そして函中時代、青春の思い出に浸る毎日です。同窓会の発展を祈念申し上げます。

池上謹之助(45期・昭18年卒)

毎年の事乍ら幹事の方々御苦労様です。さて7月19日の同期会にて、10月20日大沼でと通知、大沼・湯の川温泉で友と酒宴のスケジュールを決めました。勝手に白楊ヶ丘同窓会を10月23日と決めつけ、昼間帰京すれば大丈夫と考えたのです。

当てが外れ欠席するはめになりました。函館より白楊ヶ丘同窓会の盛会を祈っております。合せて幹事の方々の御健勝を祈ります。

渡辺 憲一(49・50期・昭21・22年卒)

幹事諸兄の御苦労を謝します。神尾 博子(53期・昭26年卒)いつもお世話おかけしてあります。3年間の東京生活を終えて又秋田市に帰って参りました。今後共よろしくお願ひ致します。

青木 貞憲(54期・昭27年卒)

昔を思い出す懐かしい写真の22号を秋田まで送付して下さい。ありがとうございます。ごさいました。会員の皆様にもよろしくお伝えの程を。

横山 滋(56期・昭29年卒)

夫滋、平成9年10月5日他界致

しました。皆々様のご健祥とご盛会をお祈り致します。(興様)

加藤 秀一(57期・昭30年卒)

函館・札幌・東京の順番で年一回開催される同期会(全国大会)に出席することが多く(平成11年9月は大沼公園)、同窓会には足が遠のいており、いささか反省しています。

伊藤 征子(59期・昭32年卒)

毎年9月に入りますと東京白楊だより心待ちしております。読み応えのある内容、いつも御苦労様です。

岸本 文子(59期・昭32年卒)

いつもいつもお手数をおかけ致しております。感謝申し上げます。

飯田美津子(59期・昭32年卒)

同窓会幹事の方々いつも会報の送付などありがとうございます。会にはまだ出席したことがありませんが、いつか…と想っているだけで楽しみです。今夏も函館へ参り中部高の玄関前に立ちみて違和感とブラスの音に懐かしさを感じたり、母校の前では素直になれて楽しかったです。

古川 セツ(59期・昭32年卒)

お世話になっております。岩崎 英子(60期・昭33年卒)よろしくお願ひ致します。

伊藤 紀子(60期・昭33年卒)

東京白楊だより22号は、読みこたえがあり楽しめました。関係各位の熱意が伝わって参ります。

佐々木孝吉(60期・昭33年卒)

職業柄(カイロプラクター)小生には停年はありませんが、還暦後の楽しみとして3年前から陶器づくりを始めました。

加藤 紘三(62期・昭35年卒)

繁雑なお仕事、担当の方々にはい

つも感謝しております。来年は卒業してから40年、早いものです。皆様の御健康御多幸をお祈り申し上げます。

鎌形 寛子(62期・昭35年卒)

同窓会を楽しみにしています。柳生 芳枝(63期・昭36年卒)いつもありがとうございます。

藤田 文子(64期・昭37年卒)

足の調子が悪いのですが、口だけは人一倍動きますので、あいかわらず多忙な日々を送っています。同期の皆様にごさよろしくお伝え下さいませ。

川本 裕夫(64期・昭和37年卒)

いつもお世話様です。ベルリン、ウィーン、ジュネーブ、イフルなどを視る機会があり、これらの街で路面電車が重要な役割を果している事を学びました。函館の市電も高齢化する社会にあった交通手段として、また軌道が街のわかり易さのガイドとして、有効に再活用してほしいものだと思ひました。



富村 陽子(66期・昭39年卒)

お役目にくらぶまでです。戸田 りん(66期・昭39年卒)白楊だより楽しく拝見させていただきます。今後共同窓会の盛会を祈っております。又いつか出席

したいと思いつつ。

新谷 真秀(67期・昭40年卒)

「東京白楊だより第22号」中、昭和35年当時の職員室の写真を非常に懐かしく拝見しました。今は亡き諸先生に黙祷。

加賀 幸彦(67期・昭40年卒)

総会は土・日になりませんか？

坂口 勇治(69期・昭42年卒)

函館の故郷を想う詩、故郷の街にもふるか、今朝の雨、雪をとかすな情とかすな」

岩切 省三(69期・昭42年卒)

お世話頂き感謝申し上げます。

花巻 省三(69期・昭42年卒)

旧交を温める機会を楽しみにしております。

園 蘭美(69期・昭42年卒)

皆様のご活躍大変うれしいです。これからの人生もっと楽しみたい気分です。健康管理に気をつけ、マイペースですが自然を感じて、21世紀を過ごしたいと思っています。

吉田 雄治(69期・昭42年卒)

先日の同窓会では楽しいひと時を過ごさせて頂き心より御礼申し上げます。ところで当日の抽選会で特別賞を頂戴しましたが、本日そ



のお宝を拝受致しました。貴重な一品、近隣の方々と「イモパティ」を開いて心ゆくまで賞味致したいと存じます。誠にありがとうございました。柳の下のドジョウではございませんが、次回も又期待致したいと存じます。つきましては皆様に申し訳ないのでカメラで「奉仕」させて頂く所存です。宜しくお願ひ致します。

中村 興治(71期・昭44年卒)

「東京白楊だより」ありがとうございました。親睦会には次回出席させていただきます。

佐藤 昭治(71期・昭44年卒)

48才に人生を見直すため大学院にて学んでいます。50才には無事修士論文が完成できればと自分を励んでいます。函中魂を見せてやりたいですね。皆様に宜しくお伝え下さい。

片岡 進(71期・昭44年卒)

一九五〇年生まれの我ら仲間もいよいよ50代に突入。これからは人生の面白い時ですね。気楽に頑張ろうではありませんか。

川村 哲雄(71期・昭44年卒)

第71期の同期25名が7月24日(土)東京日航ホテルで水江先生を囲んで同期会を開きました。今後とも

定期的に同期会を開催出来たらと思います。

谷口 雅典(72期・昭45年卒)

日時の関係で空路を利用しながら昨今の帰函、久々にフェリーで北帰行。海峽上から見る臥牛山(なげか牛の尻と呼んでいた)は昔の姿そのままでした。(一九九九年仲秋)



五十嵐信博(74期・昭47年卒)

事務局の皆様お世話様です。今年久しぶりに帰省しました。暑い暑い函館でした。

龍崎 千遙(74期・昭47年卒)

ブエンスアイレスに出張しており、東京支部総会には出席できませんでしたが、来年は同期生を誘い、ぜひまた出席したいと思っています。

中沢 満(76期・昭49年卒)

函中卒業後24年間仙台にて過ごして参りましたが、平成10年4月に東北大学から弘前大学へ転勤となりました。

石田 人士(81期・昭54年卒)

四月から青森県に転勤となりました。

清水 真(82期・昭55年卒)

事務局の皆様、本当に御苦労様です。

西川 美樹(84期・昭57年卒)

御苦労様です。お元気ででしょうか？

平井 文三(86期・昭59年卒)

繰越金の同期会への補助は絶対反対。同期会はそれぞれの年齢が自分の財布に合った会合を開くべき。それくらいなら33才の私でも高過

評議員会報告

前年度の評議員会でも取り上げられた「剰余金」の使徒に関する質疑応答が今年度も繰り広げられた。

函館に今年の四月、「未来大学」が開校した事は、故郷の明るいニュースとしてご存知の方は多いはず。

その事務局の任にあつた本校の同窓生が、募金の協力を求めて、昨年の東京大会を訪れた。それを受けた支部長はじめ執行部は、これから母校を卒業していく後輩達の役に立つこととして、剰余金の一部をその寄付に充てる事は、同窓会の主旨に

適う事と考えたが、四月の評議員会で協議してからは開校に間に合わない為、役員の話し合いのみで寄付金を贈る事を決定

ぎると思う親睦大会の会費を少なくとも若年者については下げ、若い同窓生が参加しやすいようにすべき。同窓会でも、年金制度でも、誰が次の時代を担うかを考えねば潰れてしまう。

し、「仮払金」として処理した。それをこの会議の席上で承認して貰い、十二年度で正式に計上したい」と語ったのである。

そこで執行部の独断は固より、寄付の正当性が問題となった。侃々諤々の意見が戦われた末、執行部の必死の説明と説得でなんとか理解を得ることができた。

「気骨」の精神を失わぬ大先輩の白楊魂健在！の姿勢を目の当りにして、気の引き締まる思いを強く持った今年の評議員会であった。

その後に行われた会費制の懇親会では、いつも通り和気藹々の集いであった事は、言うまでもない。

(平成十二年度評議員会・平成十二年四月十九日)

副支部長(総務担当)

梅田やよい(69期)記

平成11年度東京支部 会計決算書

収入の部	
前年度繰越金	¥7,617,543
総会費(147名)減	¥1,307,000
年会費(909名)増	¥2,631,000
利息収入	¥54,688
雑収入	¥70,000
計	¥11,680,231

支出の部	
総会関連費	¥1,408,273
会報関連費	¥929,907
事務費	¥579,378
会議費	¥116,095
函館未来大学寄付金	¥1,000,000
その他	¥722,870
次年度繰越	¥6,923,708
計	¥11,680,231

札幌支部総会および懇親会に出席して

札幌支部第二〇回定期総会および懇親会は、平成二十二年六月二三日札幌グランドホテルで約百名が参加して開催された。午後六時からの総会では、物故者への追悼の黙とうに始まり高島支部長が議長になり総会は滞りなく終り五十六期の奥瀬哲氏の「日常生活のストレスによる健康障害」と題しての有意義なお話を拝聴した。そのあと三十二期の松本氏の乾杯の音頭で、懇親会が始まり、久しぶりに顔を合わせた同窓生達の楽しい会話がはずみ、なごやかな雰囲気でした。最後の校歌の時は下級生達が壇上に立ち、同窓会歌の時は大先輩達が壇上へ力強く歌って居り、特に三十五期の杉田正さんは楽しそうにタクトを振り、まだまだお元気で張り切っていました。懐かしい校歌に終り再会を約して解散した。

副支部長・54期・杉田 博子記

つつじヶ丘・青雲同窓会に出席して

平成二十二年一月三日、西高の同窓会が恵比寿ヒアステーションで行われた。東京支部から二上支部長はじめ、杉田、小林、木戸の副支部長が出席した。二年に一度の開催とあって三名を超える盛況ぶり、旧制高女先の先輩達の元気が目立っている。学校によって運営のやり方が違つのは当然だが、函中と較べると女性が多いせいかわやかでお祭りのな雰囲気がある。大会の運営委員が準備に二年も掛けているのでそれなりに演出されている。応援団OBによるフレンドリーコールで盛り上がり終了となる。各学年毎に同期会が引き続き行われるようでステーション内のお店は貸切状態になっていた。ある学年の会場を覗いたら同窓会の方には十人もいなかったのに同期会には二十人以上も集まっていた。やはり同期会の充実があつてこそ同窓会なのであつたと思つた。

東高の同窓会は毎年五月に開催されるが、当番幹事によつて会場が変わり、今年はフロラシオン青山で五時から開かれた。東高の特徴は総会が終わると写真室で全員の撮影があつて、それがまた一騒動で一人からの人が一斉に静止するというのも大変な様で、それも盛り上げの一つなのかもしれない。親睦会のイベントでは中・高年者が中心のハワイアンバンドが登場、同窓の女性も一緒にラダダンスを踊るといふ趣向も皆で楽しむ和気藹々の会となった。やはりその年の幹事によつていろいろ違いがあるものだと感じながら他校での同窓会を楽しませてもらった。

副支部長・64期・小林 嘉則記

★白楊ヶ丘同窓会東京支部ゴルフ会「第十三回・第十四回ポプラ会」
★三校対抗ゴルフ会・第四回函館巴会の報告

白楊ヶ丘同窓会東京支部のゴルフ愛好者によるコンペ「ポプラ会」は、今年で開始以来七年を経過し、本年も二回開催された。

第一三回は、平成十一年十一月十六日、埼玉県の浦和ゴルフ倶楽部で、過去最高の二十九人が参加して行われた。この日は、北海道の冬間近を思い起こさせる強い北風と寒さの中、ひたすら我慢のプレーが続いた。

成績は、松岡正泰氏（第61期）が第四回コンペに続いて二度目の優勝をバースグロで飾つた。なお、この日のコンペには、57期と61期が誘い合わせてそれぞれ六人参加し、さながら三同期会の雰囲気だった。両期とも、コンペ表彰式



の後に、会場を変えて改めて同期会を行ったとのことでした。

第一四回は、平成十二年六月二五日、前回と同じ浦和ゴルフ倶楽部で二十四人が参加して行われた。この日は、北海道育ちには最も苦手な高い気温。函館なら確実に真夏。それも年に数回しかないほどの暑さになった。しかも無風で、苦しいほどのプレーとなった。

成績は、佐古則興氏（第64期）がバースグロを獲得するとともに初優勝した。

ポプラ会コンペでは、毎回の優勝者に、棋士が対戦中に使用する扇子に二上支部長ご自身が揮毫した「二上賞」を進呈されているが、第一三回優勝の松岡氏、第一四回優勝の佐古氏に、この扇子が贈られた。

このポプラ会とは別に、平成九年より、函館西高校と東高校の関東地区の同窓会支部とゴルフを通じて相互交流を図ることを目的としたコンペ「函館巴会」が開催されているが、これの第四回コンペが、中部高が幹事役で、平成十二年四月十三日に埼玉県の霞が関カントリー倶楽部で西・東校各二人、中部一五人の計三十九人が参加して行われた。

成績は、個人では西の森英爾氏が、また団体は西校が優勝した。中部は、伊藤威史氏（第60期）が三位に入賞したほか、団体では準優勝だった。



なお、次回（第一五回）のポプラ会コンペは、11月21日（火）浦和GC（8:30アウト・インスタート8組）で予定しております。登録会員の方には改めて案内状をお送り致します。また、案内状をご希望の方は、FAXにて、住所・氏名、卒業期を左記までご連絡下さい。

ポプラ会申込み先

FAX: 〇三三四四 六八五四

63期・小林嘉則 宛

第24回親睦大会

10月27日(金)、星陵会館で

講演「東洋医学に学ぶ心とからだの健康法」 片山 明子さん

講演会 午後5時～6時 懇親会 午後6時～

講演者プロフィール



片山明子(かたやま あきこ)

放送作家・鍼灸師

昭和九年、東京生まれ。函館中部高校昭和27年卒(54期) 早稲田大学卒。日本放送作家協会、日本脚本家連盟、全日本鍼灸学会会員。ドラマ、ドキュメンタリー、テレビスクジヨッキー、スタジオ構成など、テレビ・ラジオの脚本1万本以上を手がける他、映画、ビデオ、オペラ、舞台構成など広い分野で活躍中。傍ら、インタビュアーや司会、ディスクジヨッキーを受け持つ。語り手としても、感受性に富んだ表現力には定評がある。また、合唱団白樺では54年の入団以来、企画・構成責任者・司会として参加。

主な作品に「酈歌」(Y.T.S.テレビ)地方の時代賞映像コンクール入賞、「志村ふくみの染めと織り」(TBS・ラジオ)などがあり、著書に「女性のためのシナリオライター教室」がある。

一方、15年前(昭和60年)より

片山明子の鍼灸治療室「パレアナ」の院長として、多くの患者さんの治療に当たっている。又、昨年春まで東京医療専門学校の講師として臨床各論病理や、鍼灸理論などを講義。

現在、ロイヤル・アカデミー

オブ・ホメオパシー校の三年生としてホメオパシー(ヨーロッパの漢方ともいうべき薬学)を勉強中。来年五月、イギリスの資格試験を通ればイギリスでは医師と同格のホメオパシー医の資格を取得できる。(ちなみにイギリス王室の主治医はホメオパシー医) 同時に、ヨガ、気功、呼吸法、瞑想法などの教室を主催、幅広い健康指導も続けている。

星陵会館 ご案内



星陵会館(都立日比谷高校同窓会館)

千代田区永田町2-6-2 電話:03-3581-5650(当日のみ)

地下鉄有楽町線・半蔵門線・南北線/永田町駅(6番口)から徒歩5分
地下鉄銀座線・丸ノ内線/赤坂見附駅から徒歩10分
地下鉄丸ノ内線・千代田線/国会議事堂駅(5番口)から徒歩7分

函館情報

：函館市東京事務所：

当事務所は、赤坂プリンスホテル旧館に面したプリンス通りに位置し、麹町会館の向かいのビルにあります。

中央官庁や関係団体との連絡調整をはじめ、企業誘致活動、Uターン相談、さらには観光宣伝等を主業務に、市政に関する情報収集情報提供を行っています。スタッフは所長以下四名です。いつでも皆様のサロンとしてお使いいただけます。お待ちいたしております。

所長 古川 雅章

東京都千代田区紀尾井町3 29

紀尾井町山本第2ビル2階

電話：03-3331-0072

FAX：03-3331-0339

：函館市の近況：

・四月から介護保険制度が開始され、要支援・要介護の認定を受け

た方は、訪問介護や看護が受けられます。現在、市内で介護保険の対象者は、約七千四百名を超えています。

・人口は、五月末現在で、一九、三三三人、世帯数は、一二九、四八三世帯となっております。自治省に対し、地方分権の推進で個性あるまちづくりを進めるべく、権限委譲等の特例の対象になる、特別市の申請をお願いしています。

・「公立はこだて未来大学」が四月に開学いたしました。一期生として二五一名の学生を迎えました。市内から二割、道内四割、道外四割の比率の入学数となっております。また、六月には「輝きの彼方」と名付けられた開学記念モノユメントの除幕式も行われました。

・「新・市立函館病院」の建物は四月に完成、十月オープンを目指し医療設備の設置を進めています。診療科目二科、病床数八五床という規模で、北海道の基幹病院としての役割を果たします。

東京白楊だより 23号

発行 行

白楊ヶ丘同窓会東京支部

発行人

二上 達也(52期)

編集責任

小林 嘉則(63期)

発行日

平成12年9月1日

【東京事務所】

〒160-0022

東京都新宿区新宿

TEL:03-3335-1138

TEL:03-3335-2628

FAX:03-3334-1504